

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：34313

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03984

研究課題名(和文) サステイナブルな地域社会を形成するための生活困窮者支援総合相談機能の開発的研究

研究課題名(英文) Developmental study of comprehensive support function for needy to form a sustainable community

研究代表者

川島 ゆり子 (KAWASHIMA, Yuriko)

花園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50507142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、持続可能な地域共生社会を構築していくことを目指すために、これからの地域社会を担う存在としての子どもの育ちをどのように地域で支えるかということに焦点化しそのためのツールとしての「学習支援」のあり方に対し、ボランティアとしての学生の関わり方、場のつくり方、専門職としてのソーシャルワークのあり方を探求することを目指した。

その結果、学習を支える学生ボランティアと子どもの関りが子どもの自己肯定感を高めることが確認され、また子どもの学びを支えるために、スクールソーシャルワーカーとコミュニティソーシャルワーカーの連携の重要性を確認することができた。

研究成果の概要(英文)：In order to build a sustainable community, this research focuses on how to support the development of children who will be responsible for the future in the community, and for that purpose "learning support" as a tool, I aimed to explore how to engage students as volunteers, how to create a safety place for children, and how social work as professionals should be.

As a result, it is confirmed that student volunteers supporting children's learning and children's relationships will enhance the self-affirmation of children, and confirm the importance of collaboration between school social workers and community social workers to support children's development in the community.

研究分野：社会福祉学

キーワード：コミュニティ 学習支援 生活困窮者支援 ボランティア コミュニティソーシャルワーク スクール  
ソーシャルワーク 持続可能性 ソーシャルワーカー連携

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景として、近年制度の狭間におかれる人への支援をどのように総合的に受け止め、関係する専門機関、および地域住民が協働していくかという課題に対して、政策的に仕組みづくりを推進していこうとする動向がある。2000年厚生労働省「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する研究会報告書」において、地域社会で生起する生活課題が多様化、潜在化し、従来の社会福祉の主たる対象であった貧困の軸に加え、心身の障害や不安、社会的孤立や孤独、社会的排除や摩擦という軸を新たに加えなければ捉えきれないような課題が増大していることが指摘された。従来の縦割り行政による制度的な福祉では、はざまにもれ落ちるケースに対応することができず、地域における総合的な支援システムの必要性が喫緊の課題として提起されている。さらに、2008年厚生労働省「地域福祉のあり方検討会報告書」が提出され、地域の中での包括的総合的な相談支援体制のありかたが希求される状況にあった。

### 2. 研究の目的

生活困窮者自立支援事業において、任意事業として規定された「学習支援事業」が、子どもたちのソーシャルキャピタルを豊かにすることにどのように貢献しうるのか、そのことが子どもたちの将来の選択肢を選び取る子どもたち自身の潜在能力（capability）にどのように貢献しうるのかについて明らかにすることを目指した。また、子どもたちの将来を支えるソーシャルワーク支援のあり方、特に多職種連携による支援のあり方についてモデルを示すことを研究目的とした。

### 3. 研究の方法

#### 1) 貧困の連鎖、子どもの貧困に関する内外の政策・プログラム研究（文献研究）

研究プロジェクトを立上げ、実践者との協働研究も行いながら、セツルメント活動における学習支援の意義を歴史的に検証し、さらに本研究プロジェクトの調査フィールドである京都市、大阪市だけにとどまらず、他府県の学習支援事業実施状況についても研究会を開催し情報収集を行った。

2) 学習支援現場でのソーシャルワーク実践調査 生活困窮者自立支援法に規定される事業において、学習支援は任意事業の位置づけにある。その中でも意欲的に2013年度よりモデル事業として学習支援を実施する現場において、学習支援を通じて抽出されたニーズ、学生ボランティアと児童の相互作用による効果、支援実態の現状を明らかにすることを目指した。具体的には、以下の実践研究を行った。

・近畿圏における学習支援ボランティア（大学生）に対し、学習支援における課題を明らかにするための質的調査実施

3) 学習支援を推進するために学校と地域での支援活動の連携の必要性が2)のパイロット調査によって明らかになったため、学校を基盤としたソーシャルワーカー（以下SSW）と、地域を基盤としたソーシャルワーカー（以下CSW）の連携プロセスを明らかにする調査研究を実施した。

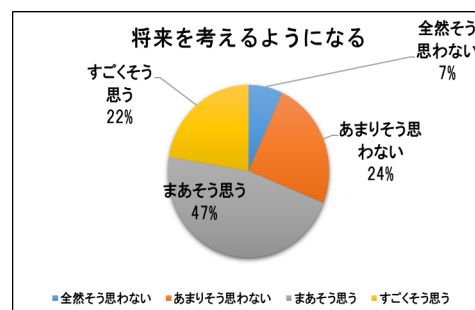
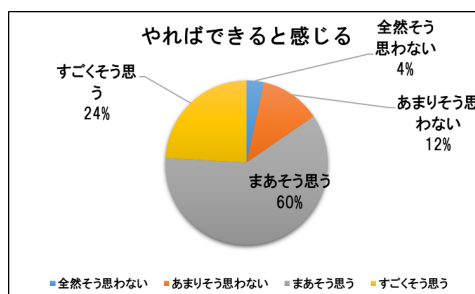
4) 学習支援現場の実践実態を明らかにするための、学習支援者、利用者、生活保護ケースワーカーに対してアンケート調査を行い、学習支援の成果および課題を検証した。

### 4. 研究成果

本研究の3か年の成果としては生活困窮者自立支援事業の任意事業として始まった学習支援事業の現状を支援者、利用者、ケースワーカーへのアンケート調査から抽出し、学習支援事業の意義について明らかにしたことがあげられる。

利用者にとって、誰かに話を聞いてもらえる場、自分自身の自己肯定感を他者との関りの中から高めることができる場として、学習支援の場が機能するという事は、現時点での学習支援としての効果のみならず、子どもの将来に向かっての潜在能力（ケイパビリティ）を高めることに寄与できることにつながる。そのことを考えると、学習支援の場は一定の効果を上げているということを実証研究によって明らかにすることができた。

#### ・学習支援利用者が感じる変化



子どもたちの変化の項目間の相関を検証していくと、子どもたちの変化にある種の段階があることが示唆される。

「よく話す」ということが、「安心・居場所」の項目との間に相関があることが明らかとなり、「自己肯定感」の項目（自分らしくふるまえる・自信がもてる）には「安心・居場所

所」の項目との関連が確認される。また、「学習」の項目（学習意欲・成績）は「自己肯定感」の項目との関連が有意となった。

このことから、学習支援の成果を目指すのであれば、勉強を教えることだけを事業目的とするのではなく、まず安心できる相手と「よく話す」ことが「安心・居場所」として感じる場を形成し、その「安心・居場所」と感じることで「自己肯定感」を高めそのことが「学習支援」の成果を生み出していくということが示唆された。

つまり、この場が安心できる場であるということがまず前提として最も大切な項目であるということが明らかとなった。

大学生ボランティアとの何気ない会話や、ニックネームで呼び合う関係性という「ゆるい居心地のよい居場所」という学習支援現場の雰囲気、固有の価値として評価されるべきであることが検証されたといえるだろう。

しかしながら、学習支援の現場に携わる支援ボランティアに対しては、十分な後方支援ができていたとは言えず、戸惑い悩む学習支援ボランティアの姿も浮き彫りとなった。

学習支援の実践をただ事業委託先に丸投げするのではなく、子どもを取り巻く多職種特に CSW、SSW、生活困窮者支援の相談業務にあたるソーシャルワーカーの連携実践が求められる。

またもう一つの研究の柱である、SSW と CSW の連携プロセスを明らかにする実証研究では以下のことが明らかとなった。

子どもの貧困への支援は、子どもの発達保障という側面から考えると、子どもの発達段階に寄り添いながら長期間の継続的な支援が求められる。また支援の多様性も求められる。つまり学習を支援するだけでは生活が整わず、生活支援を行うだけでは教育に向かわないため、貧困の中に育つ子どもへの実行性のある支援を行うという命題に答えることには繋がらないのである。ゆえに、貧困の連鎖を断ち切る可能性のあるチーム支援が必要となる。学校（教員）は、子どもたちの暮らす家庭の生活全体を支える支援を「家庭支援」という言葉で表現するのであるが、「家庭支援」は漠然としていて、結局は関係する専門職が互いにどのような役割を担うべきかが見えてこない。学習支援の場である学校と、生活支援の場である家庭（地域）を行き来する子どもの姿をしっかりと追い、それぞれの場でソーシャルワークの力を発揮する SSW と CSW の支援がうまく噛み合う事が必要である。

増加する複合多問題ケースという学校現場での実態、および貧困対策法および対策大綱等により政策的推進により、学校現場は地域の連携を求められている現状がある。そのことが SSW と CSW の連携を促進する外部要因となっていることがインタビュー調査から明らかとなった。

SSW と CSW の連携を促進するためにはキーパーソンとなる校長に福祉視点の理解を促す働きかけが求められる。また理解を得るために、CSW の機能をまずは SSW に理解してもらう必要があることも研究結果から明らかとなった。

CSW が子どもの支援を目的に学校に入っていく際には、学校特有の流儀があることを理解し、SSW に橋渡し役（通訳）を依頼することが求められ、また CSW が学校で役割分担を担うためには CSW の実践の土台である地域とのつなぎ方を SSW や学校が理解しておく必要がある。

全体の課題意識、役割を共有するためにケースカンファレンスが有効であるが、その際に専門性や立場によって視点がずれることが、当然であるという理解にたつて連携を進める必要がある。たとえ視点が違って子どもへの育ちを心配する思いは共通であるので、その意識を中心におき他の専門職も巻き込んでチーム形成をする必要があることが、連携プロセスを検証していく上で明らかとなった。この結果からは、連携がどちらか実践に統合されるものではなく、新たな協働実践を形成していくものであるということが、明らかになったといえる。

本研究は日常の実践で連携を経験している SSW と CSW を研究対象としたが、彼らが互いに連携し合い、子どもの教育保障を実現できた理由としては、互いの支援方法、よって立つ支援の根拠、アセスメントの視点を学び合い、補完性を高めていたということが明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

新崎国広（2017）「学校と地域の協働を促進する教育支援人材の役割と意義」【査読無し】『日本教育大学協会研究年報』35, pp159-169.

野尻紀恵・川島ゆり子（2016）「貧困の中に育つ子どもを支える連携支援プロセスの視覚化」【査読有】『日本福祉教育・ボランティア学習学会紀要』26, pp15-25.  
[https://doi.org/10.20711/jaass.26.0\\_3](https://doi.org/10.20711/jaass.26.0_3)

〔学会発表〕（計 6 件）

① 川島ゆり子（2017）「厚生労働省地域力強化検討会最終とりまとめをコミュニティソーシャルワークの視点から読み解く」日本ソーシャルワーク学会・研究集会

② 川島ゆり子（2017）「制度の狭間問題に対するコミュニティソーシャルワークの開発アプローチ」第 34 回日本ソーシャルワーク学会学会企画シンポジウム

川島ゆり子（2016）「ソーシャルワーカー連携プロセス検証をもとにした包括的支援

を推進する教材開発の試み」第 30 回日本地域福祉学会

川島ゆり子 (2016) 「地域包括ケア推進を目指す地域ケア会議運営のあり方」第 64 回日本社会福祉学会

川島ゆり子 (2015) 「地域を基盤とした福祉と教育の連携の可能性」第 29 回日本地域福祉学会

川島ゆり子 (2015) 「子どもの育ちを支えるソーシャルワーカーの学びあいプロセス」第 21 回日本福祉教育・ボランティア学習学会

〔図書〕(計 3 件)

牧里每治・川島ゆり子・加山弾 (2017) 『地域再生と地域福祉』総 308 p, 相川書房, pp26-31, 75-87.

川島ゆり子・永田祐・榊原美樹・川本健太郎 (2017) 『地域福祉論』総 280 p, ミネルヴァ書房, pp1-6, 9-20, 39-58, 75, 149-159, 183-194, 195-205.

牧里每治・川島ゆり子 (2016) 『持続可能な地域福祉のデザイン』総 298 p, ミネルヴァ書房, pp159-173, 263-278, 279-291.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川島 ゆり子 (KAWASHIMA, Yuriko)  
花園大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：50507142

### (2) 研究分担者

吉永 純 (YOSHINAGA, Atsushi)  
花園大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：70434686

新崎 国広 (ARASAKI, Kunihiro)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：10362740

(3) 連携研究者  
( )

研究者番号：

(4) 研究協力者  
( )